

氏 名 はやし ゆき お 夫
 学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)
 学 位 記 番 号 論 人 博 第 8 号
 学位授与の日付 平成 13 年 11 月 26 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 東北タイ農村における実践仏教の生成と変容
 ——ラオ人社会の宗教民族誌——

論文調査委員 (主 査)
 教授 福井勝義 教授 加藤 剛 助教授 田中雅一
 教授 石井米雄(神田外語大学)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、タイ系民族のラオ人を対象として、東北タイで集落が形成されてゆく過程を明らかにしつつ、人びとが築き上げてきた実践仏教の動態を、地域の文脈から綿密に描きだした民族誌である。使用する資料は、1983年から90年代にかけての東北タイにおける長期間にわたる集約的調査ならびに広域調査、1989年以降にラオスで実施した広域調査で得られたものである。

従来の東南アジア上座仏教の人類学的研究は、仏教と土着の精霊祭祀の併存あるいは混淆の様態に大きな関心を寄せてきた。第一章は、個々の宗教システムに内在する論理からのみでは両者の動態的な現実に迫ることはできないとし、仏教や精霊の概念自体を地域の文脈からとらえなおす必要を論じる。そのために第二章と第三章では、対象となるラオ人社会の特徴を国家間と民族間関係から検討する。ラオ人集落の形成過程を再構成しつつ、集落ごとの「村の守護霊」祭祀の有無、仏教守護力の信仰を規準に村落類型を呈示し、持続する「村の守護霊」祭祀にも仏教儀礼の様式が混在する事実を述べる。このような背景を示したうえで、第四章は、「村の守護霊」祭祀を廃止した一集落での仏教、魂、精霊に関する儀礼を記述し、功德を積んで来世での生まれ変わりを願う「再生の仏教」と精霊世界との関係を検討する。第五章は、仏教守護力の実践を「力の仏教」としてとらえ、仏法の力で悪霊を祓うモータムの活動とその台頭の背景を記述する。モータムは出家経験をもつ男性である。そのため、第六章で出家行動の過去と現在を比較する。同時に、近年の老後の再出家、瞑想修行のための「森の寺」を造営する動きを社会変化とのかかわりで論じる。第七章は、「村の守護霊」祭祀を残す集落における儀礼の変貌を近年の郷土文化政策の流れのなかで記述し、全体の議論を総括する。

実践仏教にかんする先行研究は、仏教と非仏教という二つのシステムを対置させていた。すなわち、仏教は、仏法僧に貢献する布施や出家によって功德をうむシステムであり、功德を重ねて良き来世を得たい、将来の境遇を良くしたい、という目的にかなう実践すなわち積徳行(タンブン)で代表される。一方の非仏教は、精霊祭祀のように酒や供犠によって豊穡と日常の安寧を祈願する現世利益のシステムである。東北タイのモータムのようにパリー語の章句を呪文として精霊を祓う仏教は、仏教が大衆化する過程で生じた呪術的实践すなわち二つのシステムの狭間の現象とみなされる。この構えは、一方で精霊祭祀を個別でローカルなものとし、他方で仏教を一元的な制度とみなすため、人びとが暮らしのなかで築いている多様な宗教的現実を正面から扱うことができない。

本論文は、日常の実践が刻み込まれた「場」から出発する。すなわち、一村での住み込み調査にくわえ、二国にまたがる広域調査で得た口述資料や現地語資料を用いてラオ人社会とその地域の諸相を浮き彫りにする。今日のラオ人は植民地勢力、国家間関係で東北タイとラオスに分断されて居住する。タイ国の為政者たちは、東北タイのラオ人を辺境の「劣等民族」とみなしてきた。ところが、隣人として同じ東北タイに住む少数者の非ラオ人にすれば、マジョリティのラオ人は移動をくりかえして生活空間を拡げてきた人びとである。このことは、古老の記憶がたどれる1930年代以降の移住過程を実証し、そうした定着後の経緯から、ラオ人の集落を大きく二つの類型にわけると。ひとつは「村の守護霊」が代表する守護霊祭祀とモ-

タムが併存する集落であり、もうひとつは守護霊祭祀が衰退しモータムが優勢な集落である。いずれの集落にも聖域としての「村の守護霊」の森があったが、後者の集落は、ある時期から農地などに転用している。森を残す前者では、守護霊に仏教在家戒を与えて供犠を簡略化し、花やローソクを酒にかわる供物とするなど、儀礼様式を「仏教化」する傾向が認められる。

第四章は、守護霊を放逐したモータムが優勢な一村での日々の儀礼、年中行事、葬送儀礼を含めた人生儀礼をとりあげる。在家仏教徒の功德、霊魂にかかわる実践の全貌を描き、それぞれを貫く論理を「再生の仏教」を軸にして探ろうとする。すなわち積徳行では、個人が得た功德が他界した近親、匿名の霊さらには儀礼の参集者にもふりむけられ、霊を再生させるとともに互酬の関係が築かれている。この局面はタイの他地域でもみられるが、調査村では仏教的来世と精霊が交錯する「異界」の観念が鮮明である。人に危害を加える精霊とは、社会的紐帯をもたない存在とされ、功德をふりむけることで精霊を仏教秩序にとりこみ、再生させようとする論理が強くみられる。

第五章は、モータムに焦点をあてる。悪霊を祓うモータムの仏教守護力は、各地を遊行する僧侶（頭陀行僧）に連なる師弟関係を通じて修得され、仏教の戒律を守り瞑想修行によって実現する。モータムには集落を越える多数の流派があり、それぞれ母娘間で継承される女性帰依者がある。モータムは、秘儀的な宗教的職能者というより、ラオ人社会が醸成してきた「守護力」の信仰にねざすとともに、模範的な在家仏教徒として男性一般が独占する「力の仏教」の実践である。モータムが台頭した背景は、農地の外縁的拡大の終息、国家による法的措置、仏教を「国教」化する政策、頭陀行僧の活動など、集落内外の要因から検証される。そして、ラオ人社会の移動性の停滞と関連づけて、モータムのような男性の宗教・社会的権威の範型が定着する過程を論証している。

第六章は、市場経済の下で仏教儀礼が祭礼化する一方、出家者の活動も変容している事実に着眼する。さらに、かつての「村の守護霊」の森に「森の寺」を設置することを提唱した元モータムの再出家と、その造営をめぐる一集落での葛藤から、仏教の実践が多極化している現況を論証する。そして、第七章で「村の守護霊」祭祀を残す集落での近年の動きに言及する。縮小する一方であった「村の守護霊」祭祀は、守護霊を圖像化し、村外者や僧侶を招くイベントとして再生している。集落を境界づける機能を失い、地方文化振興政策や森林保護運動と呼応して、郷土の文化を喧伝する儀礼となっている。

このように、東北タイのラオ人社会は、集落内外の社会変化と連動する生存戦略として多様な宗教的現実を築いてきた。本論文では、地域の文脈をふまえてその動態を浮き彫りにしてきた。

論文審査の結果の要旨

本論文の学術上の貢献は、東北タイのラオ人社会における宗教の生成と変容を、集落の成立過程と内外の社会変化と関連づけて記述・分析し、人びとが地域のなかで育んできた実践仏教の独自性とその歴史的な動態を浮き彫りにしたことにある。以下、本論文の注目されるべき主要な四点について要約する。

上座仏教文化圏での実践宗教（practical religion）に関する文化人類学的研究は、S. J. Tambiah による仏教と精霊祭祀の研究を分岐点として、儀礼の構造から宗教体系を理解する手法を継承してきた。しかし、本論文のように集落の形成過程をふまえながら仏教や精霊祭祀の実践的特徴をとらえ、その歴史的な動態を究明しようとする実証的研究はなかった。ラオ人社会はタイとラオスの二つの国にまたがっているため、本論文は1983年から96年にわたる東北タイ農村における長期間の住み込み調査とラオスをふくむ広域調査をふまえている。このように特定地域で重ねられたフィールドワークによる実証的な研究成果は、東南アジアにおける上座仏教徒社会に関する宗教民族誌として、高い学術的意義をもつものと評価できる。

第二に、本論文をきわめて独創的なものにしているのは、これまで明らかにされてこなかった同地域の実践仏教の姿をいくつかの点にわたって浮き彫りにしたことである。とりわけ、東北タイに特徴的なモータムとよばれる仏法の力で悪霊祓いをする専門家を、従来の研究が描いてきたような呪術師ではなく、模範的な男性の在家仏教徒として人びとがとらえている事実に着目し、モータムには森林原野で瞑想する遊行の僧（頭陀行僧）を開祖にもつ師弟関係の系譜、集落を越えて広がる多数の流派のネットワークがあることを明らかにした点は、本論文の重要な礎となっている。さらにモータムは、宗教的守護者として村内に特定の女性帰依者を持ち、母娘間で継承される持続的な関係をむすんでいる。本論文は、このようなモータムをタイ国全体の歴史的・社会的背景をふまえて詳細に検討している点でも、貴重な民族誌的貢献を果たしている。

第三に、本論文は、一見閉じられたような村落空間における精霊祭祀の変容、墓制の推移および仏教儀礼の隆盛などの宗教現象を、集落と地域を分節化していくさまざまな外的な要因、すなわちタイ国の内政改革による法制度の導入や市場経済とのかかわりで分析している。そうした宗教現象の変容を、半世紀以上にわたる同地域での「仏教化」の過程として描いている。この点は、世界宗教とローカルな実践との関係を解釈する事例として、比較宗教学や社会史研究の領域にも大きく寄与するものである。

そして第四に、本論文は、仏教や精霊祭祀の現実そのものが、担い手のジェンダーのみならず、災害や疫病など集落が遭遇した歴史的な経験によって異なっていることを論証している。そのことは、彼らが「良田探し」による移動と定着を繰り返していく過程で築いてきた多様な実践の特徴であり、20世紀初頭以来国家が全国的に一元化しようとしてきた制度仏教を相対的に受容してきた背景として欠くことのできないものになっている。すなわち、東北タイにおけるラオ人は、表向きにはバンコク規格の寺院建築様式などを積極的に受容しながら、同時にローカルな仏教実践を併存させる土壌を培ってきたことを示している。本論文は、特定地域に限定された研究であるが、宗教を人びとの歴史的過程において育まれてきた生存戦略として、集落間のみならず民族間、そして国家との関係において詳細な記述をふまえて分析をこころみた点で、「地域人類学」の新たな地平を提示するものである。

これまで述べてきたように、本論文には、数多くの斬新なアプローチや論点がふくまれている。いずれも現地語を駆使して丹念におこなわれてきたフィールドワークの産物である。さらに、東北タイにおけるクメールやクイなどの非ラオ人集落を訪ね歩いて、彼らの語りからラオ人の位置づけを照射しようとしたことは、本論文に広がりをもたらししている。また、「村の守護霊」祭祀の有無を指標として集落を類型化していく過程で、「村の守護霊」の聖なる森を宗教実践を反映する空間としてとらえたことは、きわめて注目される。

過去半世紀の間に、東北タイのラオ人は、「村の守護霊」祭祀の衰退と再生、仏教守護力とモータムの台頭、そして近年にいたる「森の寺」の建設ブームを経験してきた。ラオ人社会の動態を示すこれらの一連の「事件」は、ひとつの集落を越えて、地域さらには国家とグローバルな市場経済のうねりと重なっている。これらの事象が森をはじめとする空間認識の変貌とかかわってきたことを、本研究は具体的な資料をもとに明らかにしている。こうした視点は、ひろく東南アジアにおける森林空間を読み解く際にも有効である。つまり、東南アジアにおける多くの森林は、先住民族と後発民族との間で形成されてきた歴史的な累積空間だからである。このように本論文は、上座仏教という宗教と社会の動態的研究にとどまらず、森林を人びとの実践空間の表象としてとらえ、地域としての東南アジアを描き出すことに成功している。

以上のように、申請者の本論文は、本研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果として判断される。また、本論文の前提となった諸論文は、すでに単著を含む和文の著作のみならず、タイ語や英語の学術論文として公表され、国際的に高い評価を受けている。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年7月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。